

中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2017-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長倉, 守 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010189

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 長倉 守

論文題目： 中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究

論文要旨：

本研究は、中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に向け、省察を中核とした教師支援の具体的方途を検討するため、外部支援者との協働的な省察による授業実践力の向上、授業実践の実態・実践的知識及び研修ニーズ、省察と授業実践との関係性について明らかにすることを目的とする。

中学校社会科世界地誌学習は、網羅的・羅列的な学習の克服を目指し主題の設定に基づく高度な授業実践が求められているが、現状では授業理念の理解の困難性から従前と変わらない授業実践が見られている。一方、教師教育改革においては、教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高める学び続ける教師であることが求められ、教師を反省的实践家として捉え、省察を中核として教師の成長過程を明らかにしようとしていた。現状においては校内研修における同僚との省察がその機能を担っているが、教科の専門性に関する省察については中学校の校内研修では限界があった。

そこで本研究では、地理教育学・地理学（教科学）と教師教育学（教育環境学）の架橋や理論と実践の往還といった、教科開発学の研究枠組みを基軸として検討を進めていくことで新たな研究の地平を開拓しようと考えた。

本研究では次のような3つの検討課題を設定し、教科学及び教育環境学的にアプローチの視点や方法について検討を行い、それぞれ調査を実施した。

(1) 世界地誌学習に関する専門性を有する外部支援者との協働的な省察による教師の授業実践力の向上を明らかにする。

研究参加者である教師には、授業実践の中核となる課題意識があり、第1章で検討した地理的見方・考え方の援用等といった、世界地誌学習の授業実践力の基本的枠組みを単に伝達するのみでは、授業実践力の向上を促すことは困難であった。そこで教師の状況に即して翻案し協働省察を重ねたことにより、第2章で検討した省察を中核とする授業実践力向上の構成要素である、①実践的知識の形成や変容、②授業実践の変容、③教師自身の変容の自覚化について可視化することができた。単元を越えた複数の授業時間を対象に、教科の視点の援用した外部支援者との協働省察によりこれらの変容を可視化したことは、本研究の新規性として指摘できる。

(2) 世界地誌学習に関する授業実践の実態、実践的知識について質的に明らかにする。

経験豊かで授業実践力が高いと判断される教師の語りをもとに、教師の感覚による断片の提示ではなく、質的帰納的研究法を導入し、データに基づいて分析手順を踏まえ、世界地誌学習における授業実践に関する教師の経験や実践的知識に関する理論仮説を生成した。5つのカテゴリーと33の概念、及びプロセスの結果図により構造化した。授業実践のプロセスについては文脈性やジレンマが存在し、授業実践の模索を続ける教師の姿が明らかとなった。実践現場の最前線にいる教師が何に悩み、何を課題として感じているかについて把握しなければ、現場教師の内実に迫りうる協働省察を行うことはできず、実践現場は混乱し続けるであろう。こうした点からも本研究で得られた知見は、新規性を有するとともに実際の授業実践に貢献できる可能性を持っているといえよう。

(3) 世界地誌学習に関する実践的知識、研修ニーズ、省察と授業実践の関係性について量的に明らかにする。

S県の社会科教師を対象に質問紙調査を行った。世界地誌学習の授業実践力を「理念把握」、「生徒-地域像構成」、「主題-生徒基軸単元開発」、「総合調整」の枠組みで捉え、とくに「主題-生徒基軸単元開発」を中核として理念と授業実践の現実的矛盾の中で各枠組みが相互に関連性を有する実践的知識の構造的な特性が明らかになった。これは、第4章で行った質的分析結果を裏付けるものでもあった。また研修ニーズについては、まずは主題学習の理念を具体的に理解したいニーズが浮かび上がった。また求める相談・助言者としては、実践的研究を行う中学校教員が突出して高かった。さらに授業実践力向上の規定要因では、日常省察機会の影響が大きく全ての指標に有意な正の影響を与えていた。ただし、指標によっては研修など日常省察機会以上に影響を与えている項目もあり、授業実践力向上の方途を複合的に検討する必要性が示唆された。こうした知見は地理教育学・教師教育学双方にとり新規性のあるものとなった。

以上の考察を踏まえ、結章では、省察を中核とした教師支援の具体的方途について検討した。多忙な学校現場ではあるが、まずは教科開発学の研究者や博士課程修了者が外部支援の機能を果たすことや既存の研修体系に意図的に埋め込むことが考えられよう。加えて持続可能なものとなるよう実践者支援だけでなく指導者養成を担っていくことが必要であろう。本研究の特質は、教科開発学の研究枠組みにもとづき、研究者個人の新たな教科開発に留まらず、他の教師への支援や普及を視野に入れているところにある。筆者が学校現場にいる強みを生かし、引続き世界地誌学習の教科開発について検討するとともに、教育委員会や教員育成協議会への提言や自身の周辺の実現可能なところから教師支援の枠組みの構築を展開したいと考える。